

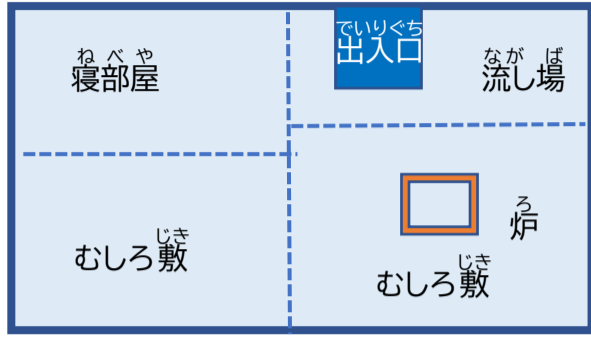
入植当時の暮らし1 (庄内地区)

もっと だいひょうてき せん ご か いたく しゅうらく

最も代表的な戦後開拓集落の暮らし

1 入植当初の住宅

雑木の丸太を縄で組み合わせ、屋根やさくりは茅葺きであった。その後、改良された住宅は、昭和32年ころまで使われた。わら布団の上に、救援物資の毛布をかぶって寝た。しきりは、麻の肥料袋を利用、後に枝を使用する。



昭和 32 年ころまで使われた住宅



入植当時の茅葺きの家



ランプの明かりの下で読書する

2 ランプ生活： 入植10年間は、ランプ生活であった。ランプの芯には、0.9 cmと 1.5 cmあった。1.5 cmのものは、明るかったが、灯油の消費量が多いため使用する家庭はあまりなかった。

明るさを増すためにホヤ(ガラスの筒)は毎日磨かなければならなかった。大人の手は大きくて入らないので、ホヤ磨きは、子供たちの日課だった。

3 食事： 食糧事情が悪く、入植当時は皮付きのじゃがいもに粟、ヒエ、量を増すために落を混ぜて主食とした。副食は、春の山菜、夏には天ヶ森で捕れたイワシを時々、冬には豊富に捕獲できた山ウサギの肉などであった。開畑され、粟・ヒエが栽培されるようになるとそれを主食としたが、量を増やすため大根を刻んで混ぜた。白米は、盆と正月ぐらいの時だけだった。



食事の様子

昭和22年3月に、入植許可が下り、5月に設営隊25名が入植。テント生活の共同作業を行っていました。6月には先発本体6名が入植。発動機・製材施設・自転車・食料を持参しています。8月には綿羊17匹を導入しセーターを自作していて、11月には、共同作業・テント生活を解散し各集落に分散しました。食糧事情が悪く、千歳地区の収穫後の残りじゃがいもを集め食用としていたそうです。当時の苦難が想像されます。



郷土館キャラクター まがりん

入植当時の暮らし2 (庄内地区)

もっと だいひょうてき せん ご かいたくしゅうらく

最も代表的な戦後開拓集落の暮らし

4 井戸水

井戸は、谷の近くに作られた。掘り抜き井戸で、当時は地下水の水位が高く、5mほど掘ると十分だった。谷から離れた学校やその周辺の人々は、現在の農協の近くにあった旧軍馬補充部の井戸を利用した。つるべ井戸の水桶は 10kg以上あったので、学校の水くみは小学校6年生以上の生徒たちが行った。



つるべ井戸(六原) 昭和40年代

5 電気：電気がついたのは、入植10年後の昭和32年(1957)初冬であった。1戸当たりの負担額は 1万2千円で、国や村が補助した。当日は集落中の仕事を休み、点灯するのを待った。長い間、電気から遠ざかっていたため、電気のことを忘れ、タバコを電球にくっつけて火をつけようとした人がいたという。



電柱を立てる

6 食生活の改善：開墾作業は重労働だった。成功検査に合格しなければ、土地を国に返納しなければならなかった。体力をつけるため農業改良普及所の指導により、料理講習会が頻繁に開催された。農繁期の保存食として、魚のびん詰や子牛(子牛は、繁殖に使用されていない乳牛の若い雄で、仔牛は食用にする若い牛)の肉のびん詰などが作られ貴重なたんぱく源となった。



料理講習会の様子

7 交通

昭和33年ころまでの千歳と野辺地間14kmの道路は、道幅3から4m、砂利が入っていないため、春先や雨天時は、泥やぬかるみで悩まされた。野辺地まで徒歩か馬車、冬は馬そりか牛そりであった。牛は人の足より遅かったが、急坂では馬の数倍に勝力を出したという。後に、トラックに代わったが、道路が悪いため、自転車のスピードと大差がなかったという。



馬そりのすれ違い (2月中旬)



郷土館キャラクター まがりん

入植当時の暮らし3 (庄内地区)

もっと だいひょうてき せん ご かい たく しゅうらく

最も代表的な戦後開拓集落の暮らし

8 登校

集落から学校までの道路も整備されず不十分だった。歩いて踏み固められた一本道や丸太の一本橋を、兄弟姉妹、助け合って元気に通った。



登校の様子

9 開墾作業

1年目は、立木の伐採、火入れ(笹などを焼く)、縄張り、太刀入れ(掘り起こすための切り込みを入れる作業)、鍬お越し、畝づくり、という順序で開墾され、大豆や粟、ヒエなどが作付けされた。2年目には、畝に混入している松や柏の細根を除去し、畝を作り直す(畝返し)。太い根は3年以上過ぎて、腐ってからでないと抜根できなかった。

松林であった庄内地区は、2m四方に松1本、柏3本くらいの割合で、太い根があったため、抜根してからでないとプラオなどの耕機が使用できなかったという。そのため、当初3年間 は人力に頼るしかなかった。10年後に行われる成功検査に合格しないと、未墾地を返納しなければならないので、各農家とも、死に物狂いで働いたという。トラクターを使用できるようになったのは、昭和32年(1957)のころであった。開墾3年目、抜根も順調に進み、牛馬による耕機使用も可能となり、じゃがいも・大豆・小豆・菜種などの換金作物の栽培が本格的になった。この頃の開拓行政の基本は、自活できる農家の育成ということで、自給用の粟・ヒエ・麦の栽培、山羊(飲用乳)・綿羊(毛糸の自作)・鶏などの飼育が行われた。じゃがいもの増産にともない、それを飼料として、豚の飼育も行われるようになり、貴重な収入源となった。



開墾作業の様子



畝づくりの様子



家族総出の菜種刈りの様子

郷土館キャラクター
まがりん



入植当時のくらし4 (庄内地区)

もっと だいひょうてき せん ご かい たく しゅうらく

最も代表的な戦後開拓集落のくらし

10 すみや 炭焼き

入植当時は、どの開拓地でも炭焼きが行われた。冬期間における貴重な現金の収入源であった。1窯60俵の木炭が作られた。等級が付けられ、1俵80円(約1,500円)から200円(約3,770円)くらいで集荷された。

雑木・柏・ナラなどの用材は豊富にあったが、60cmの長さで切ったものを、沢から炭焼窯まで運ぶのが難儀で、多くの人手を要した。3・6(高さ90cm×幅180cm)と呼ばれていた量を運ぶと180円(約3,400円)貰えたという。



すみや きちよう げんきんしゅうにゅう 炭焼きは貴重な現金収入だった

11 たね きょうどうせんべつ 種いも共同選別

普通じゃがいもは、45kg当たり300円(約2,140円)だが、種いもになると800円(約5,700円)だった。昭和26年(1951)に採種圃を設け種いも栽培を始めた。種いもの出荷は、検査が厳しく、不良品が数個混入していると出荷停止となった。春の植え付け時期には、消毒に気を配り、1株が病気に冒されると、周囲の数株を抜き、焼却した。出荷前に、集落をあげて共同選別を行い、不良品を一粒たりとも出さないようにしたという。10a当たり約40俵の収穫があった。



たね きょうどうせんべつ さきょう ようす 種いもの共同選別作業の様子

12 らくのうはじ 酪農始まる

昭和28年から29年(1953~1954)の2年間にわたる大冷害を契機に、今までの雑穀農業から酪農へと転換が始められた。昭和29年6月、酪農振興法が公布され、国の助成が行われることとなった。当時は、搾乳牛6頭で自活できるということで、6頭を目指して乳牛の導入が図られた。乳牛は大事にされ、当初の頃の牛舎は、住宅より立派だったという。



うしをひいて



郷土館キャラクター まがりん

入植当時のくらし5 (庄内地区)

もっと だいひょうてき せん ご かい たく しゅうらく 最も代表的な戦後開拓集落のくらし

13 ぼくそう 牧草づくり

当初は、人力と畜力(運搬)に頼っていた。午前4時から10時ころの間、まだ、草露が残っている時間に、牧草刈りが行われた。大人1日、6時間で5aくらい刈り取ることができた。重労働だったため、男の手でなければ無理だという。刈り取り後、3日間ぐらい天日乾燥させ、収穫・運搬となるが、この間、雨にあたると栄養価が半減し、乳質に影響するというので晴天を祈って作業が進められた。

ぼくそうが ようす
牧草刈りの様子ぎゅうしゃ うし
牛舎とサイロと牛

14 ごらく 娯楽・レクリエーション

昭和32年(1957)までは、電気がなかったので、テレビはもちろんラジオもなかった。心身を休める娯楽は、演芸会、運動会、相撲大会などであった。

(1) えんげいたいかい 演芸大会

学校の教室二つを使って、簡単な舞台を作り、歌・踊り・演劇などに興じた。賞品もあった。

(2) すもうたいかい 相撲大会

校庭の片隅に土俵が常設され、若者たちは力と技を競った。

(3) うんどうかい 運動会

学校の運動会の種目の中に、大人たちの種目が豊富に盛り込まれていた。地域をあげての大運動会で楽しい一日であった。

(4) いもんだんらいほう 慰問団来訪

子どもたちの楽しみの一つに慰問団の来訪があった。キリスト教団慰問団が、年2回、夏休みの頃と秋にやって来てくれた。

えんげいたいかい
演芸会すもうたいかい
相撲大会うんどうかい
運動会いもんだんらいほう
慰問団訪問